

特集：新型車（アテンザ）

13

新型アテンザのデザイン Design of All-New ATENZA

玉谷 聡*1

Akira Tamatani

要約

新型アテンザは、新デザインテーマ「魂動（こどう）」の真髄といえるダイナミックで生命感ある動きとスピード感、そして艶感あふれる面質を純粹に、そしてアーティスティックに表現し、他にはない圧倒的な存在感と美しさの実現を目指したマツダのフラッグシップカーである。エクステリアでは CD クラスとしての堂々とした存在感、品格とともに、あたかも隅々まで血液や神経が通う生き物がドライバの意志を忠実にタイヤの接地点まで伝えるような生命感を表現した。インテリアではドライバにはドライビングプレジャを、パッセンジャには心地よく包まれる空間を提供し、エクステリアデザインと呼応するスピード感ある造形と、CD クラスにふさわしい素材感を与え、上質なデザインとした。

Summary

The new ATENZA is a Mazda's flagship car, aiming to realize unparalleled presence and beauty by expressing dynamic lively movements and speedy feeling – the core of the new design theme “Kodo” – with pure and artistic expression of alluring surface language. Its exterior design has imposing dignified presence worthy as a car in CD segment, but at the same time it expresses dynamic vitality that directly delivers a driver's intention even to the points where tires meet ground as if it were a living creature with blood and nerves all over its body. The interior provides driving pleasure for a driver while comfortably enclosed feeling for a passenger. At a glance, its elegant design gives impression of speedy feeling, equivalent with the exterior, through suitable material feeling as CD class car.

1. はじめに

CD セグメントの歴史は長いですが、その市場規模は近年グローバルに縮小を続け、プレミアムとノンプレミアムに二極化している。市場は小さくも、そこにプレミアムメーカは各ブランドの威信をかけ、性能、品質、技術、デザインの全てに各社の先進性を表現している。新型アテンザはマツダのフラッグシップとして、「SKYACTIV TECHNOLOGY」と「魂動」デザインを究極的に体現することで、マツダブランドを飛躍的に向上させることをミッションとして開発された。

初代アテンザはアスレチックな表現を、2代目は品格や日本の美意識の表現を目指した。3代目の今回は動体としての骨格的な動き、造形テーマの躍動感、艶のレベルを飛躍的に進化させる「魂動」デザイン表現を追求する中で、疾走する捕食動物の野性的な造形テーマをアーティスティックに洗練させ、量産車に実現することに成功した。以下にそのポイントを紹介する。

*1 デザイン本部
Design Div.

2. エクステリア・デザインコンセプト

2.1 「靱 (SHINARI)」「雄 (TAKERI)」と、新型アテンザ

「魂動」デザインとは、生き物やアスリートが瞬発力やスピード感のある動きの中で見せる一瞬の美しさや力強さを捉えてクルマのデザインに昇華することであり、「靱」は 2010 年夏、「魂動」デザインコンセプトを表すモデルとして発表された。2011 年東京モーターショーでは「雄」を、「靱」のデザインテーマに、量産の可能性を示唆する CD カーコンセプトモデルとして世界に紹介した。その「雄」のデザインは当時開発を終えようとしていた新型アテンザのテーマ造形をショーカー用にアレンジしたものであり、新型アテンザのデザインは、フラッグシップモデルとして、まさしく「靱」「雄」で世界に示してきた「魂動」デザインの開発と時を同じく行われ、それをストレートに量産車に実現する役割を持って開発がすすめられた (Fig.1, 2)。



Fig.1 SHINARI & TAKERI



Fig.2 New ATENZA

2.2 様式と革新的な美を調和させるデザイン

CD クラスには、長い歴史の中で培われてきたある様式がある。それは、各機能のレイアウト、人を快適に乗せ、荷室や視界も確保するパッケージ、そして走りや空力などの究極のバランスを突き詰めながら、同時にそのスタイリングに高い престиージュ性が求められてきた中で確立されてきたものである。新型アテンザのデザインは、全体のプロポーシオンやスタンスの良さという基本的な構成に動きを追求し、過去のマツダ車にない進化した骨格を創り上げた。その上に野性的な躍動や艶を表現する造形テーマを、他にはない大胆さで採り入れた。更に全体造形をアーティストティックに練り上げることで、様式美と革新性を調和させることを目指した。

3. エクステリアデザイン

3.1 生命感あふれる動きの表現

(1) 骨格の動き

骨格では、先ず四隅にしっかりと踏ん張らせた大径タイヤと、それを強調するフェンダの張り出しに対し、キャビンをコンパクトに引き締め、ロー&ワイドな強いスタンスを創り上げ、新型アテンザの高性能な走りを表している。またキャビンの前後位置を後方に移動させ、ボデーのウェッジ角度を強めて、後方に溜められた力をショルダからノーズへ向かって解き放つような、大地を強く蹴って前へ突き進む力感のある造形を行った (Fig.3, 4, 5)。



Fig.3 Strong Tire Stance

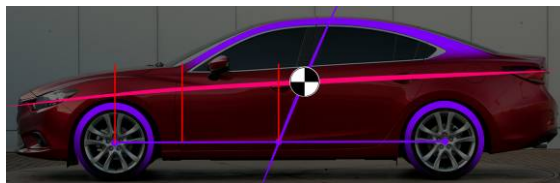


Fig.4 Cabin Position which Set Backward



Fig.5 Force Toward Front

長く伸びやかなボデーのショルダ部には、「靱」から継承したデザインテーマを CD カーとして磨き直した、疾走する動物の筋肉を思わせる 3 本の特徴的なキャラクタラインが走っている。1 本目はリヤタイヤを起点に前方へ伸びる、跳躍を表すエレガントなラインで、捕食動物が後ろ足で地面を蹴って飛び出す姿をイメージした (Fig.6)。2 本目はその「後ろ足」の蹴りを支える「腰」の筋肉の隆起を表現するリヤフェンダのラインで、跳躍の推進力を表す (Fig.7)。3 本目は、俊敏に方向転換をする前肢を支える「肩」を表現するフロントフェンダのライン (Fig.8)。これら 3 本のキャラクタラインの美しいコンビネーションは、タイヤの位置を起点とした造形コントロールをしており、ボデー全体が表す「地面を掴む鋭い跳躍」と「前へ突き進むスピード感」の力強い表現を完結させている (Fig.9, 10, 11)。



Fig.6 Leap Image Toward Front



Fig.7 Muscle on the Back for the Leap



Fig.8 Shoulder Muscle for Nimbleness



Fig.9 3 Character Lines on the Shoulder



Fig.10 Close Character Control Based on Tires



Fig.11 Artistic Surface Control

(2) 生命感を醸成する艶のある面のコントロール

ラインとラインの間に生まれる面の造形にも細心の造り込みを行い、シャープな緊張感があるなかにも艶を感じさせる、新しい面質のエモーショナルな表現を完成させた。ボデーに映り込む光はキャラクタラインと絡み合いながらある部分ではスピーディに動き、ある部分ではゆったりとどまり視線の移動につれてリズムカルな脈動を描き出す。そこに生まれる光と影のバランス、映しこまれる光のコントロールにも徹底的にこだわり、他とは明確に一線を画す独自性と魅力を備えた (Fig.12, 13)。



Fig.12 Alluring Reflection



Fig.13 Alluring Light & Shadow

3.2 CDカーとしての風格、品格の表現

(1) 強い意志を表すフロントフェイス

新世代商品群のファミリーフェイスであるシグネチャーウィングを、彫りの深いフェイスの造形に巧みに取り込み、前方を見据える眼光鋭いヘッドランプデザインと相まって、意志の強い表情を持った堂々とした品格ある「顔」を創り出した (Fig.14)。

シグネチャーウィングの延長線はリヤフェンダのキャラクタラインへつながり、ボデー全体の動きの表現に連動する。フロントグリルから始まるノーズの立体造形はボデーサイドやキャビンへと続く面による造形の起点となり、強く前進するクルマ全体の動きや力の方向性を牽引している。一方ロアグリル周りの造形は台形モチーフで地面を掴む安定感を与えている (Fig.15)。



Fig.14 Dignified Front Face



Fig.15 Strong 3D Front Form as Start Point of Body Side and Cabin Form

(2) フロントと一貫した強いリヤデザイン

リヤビューにも、フロントフェイスと同様、ひと目で新型アテンザと分かる表情と品格・スポーティさを備えたマツダのフラッグシップとしての一貫した表現を追求した。セダン・ワゴンモデルいずれも、ウェッジしたボデーと強く張り出したリヤフェンダ、コンパクトなキャビンの組み合わせによって、四隅のタイヤを意識させる安定感あふれるプロポーションを獲得し、また横長のリヤコンビネーションランプ形状が、いっそうのワイド感と安定感を与えている。左右のランプの上部を結ぶように設定されたブライトモールは、シャープさと貫録を与えると同時に、ボデーサイドからランプへのつながりも表す (Fig.16, 17)。



Fig.16 Sedan Rear Design



Fig.17 Wagon Rear Design

(3) マツダ初のヘッドランプ・ライティング・シグネチャー

ヘッドランプには、シグネチャーウィングがヘッドランプ上端のラインへと入って消える延長線上に、LED 灯による直線的な発光ラインを設け、ボデーサイドにスピーディに抜けて行く動きを与えた。更に、ドライビングランプの外周には導光体をリング状に並べた円形の発光シグネチャーを置き、これを直線の LED 発光が貫くように配置した。点灯時には直線と円によるシンプルで力強い独自のキャラクタが現れ、ひと目で新型アテンザと分かる個性的な外観を獲得している (Fig.18)。リヤコンビネーションランプにも、丸型テールライトからセンターに向かって直線的に伸びる発光シグネチャーを設定し、後ろ姿にもスピード感と、一目で新型アテンザと認識できるキャラクタを持たせた (Fig.19)。(ヘッドランプシグネチャーはハイグレード仕様を設定)



Fig.18 LED. Lighting Signature in Head



Fig.19 Lighting Signature in Rear Combination Lamp

4. インテリアデザイン

4.1 前席の空間構成

運転席には適度なタイト感でクルマとの一体感を感じられるアーチ形の空間を表現し、一目で「座って運転してみたい」と感じさせる、ドライバを中心とした空間を表現した。インパネに深く押し込まれたタイトなメータフードに 3 連メータを左右対称に配置し、ドライバを中心に推進するベクトルが感じられる奥行きのあるコックピットである (Fig.20)。

一方助手席では水平方向に通した軸で、包まれるような安心感を持てる空間とした。センタースタックの空調ルーバまでを囲んだデコレーションパネルが助手席乗員の目前に水平方向に広がり、開放的でゆとりのある空間を感じさせる。適度に量感のある断面形状を持つインパネの造形は、しっかりと守られている安心感を乗員に与える (Fig.21,22)。



Fig.20 Space for Driver & Passenger



Fig.21 2 Main Lines as a Composition



Fig.22 Interior (Black Leather)

4.2 エクステリア造形と同期したインテリア造形

インテリアデザインでは、新世代マツダのフラッグシップカーにふさわしい「粹」な造形とコーディネーションを目指した。そしてお客様に長く愛されるよう、形の新鮮さに偏重することを避け、一目で感じられる室内各部の造形のクオリティや隅々までの質感の向上に取り組んだ。

造形要素として、インパネ上部から両サイドへ流れるスピード感ある大きな動きと、インパネ中央部を水平に貫く安定感を核とした。特に動きのラインは特徴的でエクステリアの同じ部分のキャラクタラインと呼応して内と外で、一貫した世界感を表現している。またドアトリムの彫刻的な面の陰影の変化にはCDカーのインテリアにふさわしい上質な造形美を表現した。(Fig.23,24)



Fig.23 Same Speed Expression in its Exterior & Interior Theme Lines



Fig. 24 Sculptural Speed Expression on Trims

4.3 素材の質感へのこだわり

樹脂パーツやトリム材、デコレーションパーツなどの各種素材の質感は、触感の良さ、本物らしい自然な面変化の実現を徹底的に追求した。インパネアッパ部とメータフード、ドアトリム上部などお客様が手に触れやすい部分には、前席・後席ともソフト素材を用い、プラスチック的な素材感の露出を最小限に抑えた。またソフト素材とハード素材が隣り合う箇所では、素材の柔らかさ・硬さを視覚的に感じ取れるよう形状を工夫し、例えば硬い素材が柔らかい素材にめり込む形状を自然に再現した。更に、サテッククロム処理を施したメタリックパーツは、あたかも無垢の金属を削り出して、手で丹念に磨き上げたような本物らしさを醸し出すため、形状に細心の注意を払った (Fig.25)。

インパネの中段を水平に貫くラインには、新開発の積層フィルムをインサートした立体的なデコレーションパネルを2種類設定した (Fig.26)。深みのあるダークチェリーのような「ボルドーメタル」と、渋みのある黒く焼いた鋼のような「ダークメタル」である。いずれも、磨き込まれたガラスのような滑らかな表面のフィルムの最下層に、ヘアライン加工されたリアルアルミのレイヤがあり、透明感のある深みを生みながら、強い光が当たった瞬間には金属の高輝度な反射によって「凄み」を見せる。



Fig 25 Satin Chrome Parts which Have Real Metal Feel



Fig.26 New Material which Have Deep Gross Color & Real Metal Feel

5. カラーデザイン

5.1 新世代デザインの形状を最大限に表出させる新ボデーカラー

新世代「魂動」デザインを極めるため、新型アテンザのデザイン開発では造形とボデーカラーのベストマッチを追求した。大胆さと繊細さをあわせ持つ「魂動」の面の表情を余すところなく表現する、光と影、深みのある艶を持つ新色を開発した。

新型アテンザでは全8色のボデーカラー・ラインナップ (Fig.27) のうち、4色がその新色となる。

中でも新型アテンザのイメージカラーとなる **Soul Red** は、マツダが長い年月開発してきた鮮やかで情熱的な「赤」を更に極めた。難易度の高いハイライトの発色の良さと深みの両立を成功させ、内からエネルギーを発する、エモーショナルな「赤」として完成させた。エンジニアがデザイナーの意を酌み技術と試行錯誤を重ねて実現した、マツダ渾身の **Red** である。

第二のイメージカラーは「靱」のボデー色に近い **Blue Reflex** である。鍛え抜かれた金属が放つ独特の強靱な質感を表現するため、細かな光輝材をこれまで以上に緻密に配置し、滑らかな質感としなやかで強い光沢を実現した。

Meteor Grey も **Blue Reflex** 同様に硬質で密度感の高さを追求したグレーマイカである。

そして今までに存在しないほどの「漆黒のシェード」と、ハイライトの輝きを実現したのが、新開発の **Jet Black** である。

既存色の **Stormy Blue Mica**, **Aluminum Metallic**, **Snowflake White Pearl**, **Arctic White** も含め全8色を設定した。

(日本仕様は **Arctic White** の設定がないため全7色)

【ボデーカラーラインナップ】

- | | | | | |
|---|--------------------------|------|---|-----------------------------------|
| ① | —Soul Red Metallic (41V) | (新色) | ⑤ | —Stormy Blue Mica (35J) |
| ② | —Blue Reflex Mica (42B) | (新色) | ⑥ | —Aluminum Metallic (38P) |
| ③ | —Meteor Grey Mica (42A) | (新色) | ⑦ | —Snowflake White Pearl Mica (25D) |
| ④ | —Jet Black Mica (41W) | (新色) | ⑧ | —Arctic White (A4D) |



① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

Fig.27 Body Color Line-Up

5.2 「粋」な大人のインテリアカラーコーディネート

インテリア全体に、ブラックを基調にデコレーション素材を活かした、男性的で大人の魅力を感じさせるカラーコーディネーションを心がけた。シート&トリムには、革内装にオフホワイトとブラック、ファブリック内装にブラックとサンド、合わせて4種類のカラーを設定した。(日本仕様はサンドファブリックの設定をしないため3種類。)

ハイグレードモデルの革内装色の一つ、オフホワイトでは、ブラック基調の引き締まった内装にハイコントラストとなるホワイトを配し、シート形状やドアトリムのスピード感ある前後方向の動きを強調している (Fig.28)。冷たい印象を与えない、微妙に温かみのあるオフホワイトとし、永く愛用していただけるものとした (Fig.29)。革内装色ブラックでは、きめ細かさやしっとりした質感を活かす艶やかな色合いを追求し、またシートバックに採用した荒めのシボの黒のビニルレザーとのコントラストで、「凄み」を感じさせている (Fig.30)。革内装にはインテリア造形のスピード感を表現する部分に赤のステッチを配して動きを強調した。

ファブリック内装では、シルキーかつ立体感のある高品質な素材に最適な色合いで、心地よさを感じさせるサンドとブラックを、赤味や青味のわずかなブレも許さないピンポイントな色選定を行った (Fig.31, 32)。(日本仕様はサンドファブリックの設定無し。)



Fig. 28 Off - White Leather Coordination and Texture



Fig.29 Off-white leather



Fig.30 Black leather



Fig.31 Sand fabric



Fig.32 Black fabric

5. アルミホイールデザイン

17インチと19インチにサイズアップし、高い走行性能と風格をあわせ持つCDカーアピランスに貢献している (Fig.33, 34)。いずれのタイプでも、センターハブからタイヤにつながるダイナミックな動きの表現を重視すると同時に、各スポークの面に動きを持たせ撓らせることで、軽さと金属感を印象づけるデザインを目指した。塗装色にも新色を採用し、金属感をより強くしている。

19インチアルミホイールでは力強い造形のスポークを5対組み合わせ、ひねりを加えた面形状を与え、強さを表現している。

17インチアルミホイールでは、直径は小さくても全体的に厚みを持たせたデザインでソリッド感を出した。

新しいホイールでは、性能面の向上にも取り組んだ。互いに相反する要件であるダイナミックなデザイン表現と剛性の向上、軽量化の3領域の目標を同時に達成するため、デザイナーとエンジニアが緻密な検証を繰り返し、重量増を抑えながら剛性を高め、ねじれに強く変形の少ないホイールを完成させ、操縦安定性の向上とNVHの低減を実現した (Fig.35)。



Fig.33 17inch Aluminum-Whee



Fig.34 19inch Aluminum-Whee

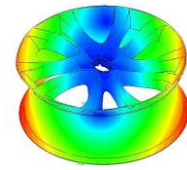


Fig.35 Analysis of Stability

6. おわりに

「目新しさ」と「新しさ」は違うとはよく語られる。私が新型アテンザに追い求めた「品格」「粋」とはアバンギャルドな「目新しさ」ではなく、歴史を理解した上で常識を打ち破る「新しさ」である。魂動デザインを進化させて表現する中で、エクステリア、インテリア、カラーコーディネーションの全てにその同じ思想で一貫性を持たせることができた実感している。

新型アテンザは、魂動と SKYACTIV TECHNOLOGY を体現する商品の第二弾となる。サステイナブルな「走る喜び」を追求し続けるマツダのフラッグシップとしての確かな進化によって、マツダブランドが今向かおうとしている新たな方向性を内外に明示し、お客様からのマツダへの信頼を更に高いものとする礎としたい。

■ 著 者 ■



玉谷 聡